

第2部 パネルディスカッション

テーマ『東京の酒造りと地域振興』

◆ファシリテーター

武藤治作酒店 武藤 一由 氏

◆パネリスト

石川酒造株式会社 代表取締役 石川 彌八郎 氏

小澤酒造株式会社 代表取締役 小澤 順一郎 氏

木本硝子株式会社 代表取締役 木本 誠一 氏

田村酒造場 代表 田村 半十郎 氏

VERTERE 合同会社 代表 鈴木 光 氏

豊島屋酒造株式会社 主任 川上 一宏 氏

東京ワイナリー 代表 越後屋 美和 氏



石川酒造株式会社 代表取締役 石川 彌八郎 氏

【外国人観光客に対する取組み】

福生市には横田基地があり、外国人が比較的多く居住しているため、酒蔵の中でレストラン事業を始めて以来、外国人から予約の電話がかかってくるようになった。それに対応するため英語ができる人を雇ってからは毎日のように英語で電話がかかってくるように。そこで、せっかくなのでレストランのほかにも酒蔵自体も楽しんでいただきたいと思い、酒蔵の見学体制も強化。現在では見学客の2割を外国人が占めるようになった。



【東京オリンピックに向けての取組み】

「東京の～」という銘の酒を作ろうと思い、弊社が行っている林業と組み合わせてみようと思った。奥多摩町や檜原村の杉の木をチップにして日本酒に漬け込み、杉の香りのする酒を「東京の森」という銘で販売している。

【適正飲酒の啓蒙】

平成25年にアルコール健康障害対策基本法が制定されて以降、飲酒運転、未成年飲酒の禁止や、妊娠中や授乳期の飲酒を控えるなど、適正な飲酒を伝えていくように業界団体から常々言われている。

【今後の酒造りの展望】

平成29年の酒税法改正により、平成30年4月1日から、麦芽の重量の5%以下であれば果実や香料を副原料として混ぜたものをビールとして販売できるようになった。地域の農産物、特産品を流用したビールが売られるようになれば、クラフトビールは地方創生の切り札になりうるのではないか。

小澤酒造株式会社 代表取締役 小澤 順一郎 氏

【日本酒全体としてのユーザーの変遷】

ヘビーユーザーである現在の中高年以上の世代が減少していることから、酒の消費量自体は漸減傾向にある。一方で、日本酒を楽しむ会や女子会などの各種イベントがあちこちで開催され、若年層や女性、また外国の人達など新たな顧客も生まれてきているように思われる。



【東京オリンピックにおける東京の酒】

東京の地酒は全国的に見てなかなかのレベルだと思うのだが、そのようなイメージが持たれていないのは残念。しかし、東京で酒造りをしている意外性が面白さにつながり、消費者の興味を引く可能性はあるので頑張っていきたい。

地酒にはその地域のカラーがあり、東京は居ながらにしてそれが楽しめる。東京オリンピックに向けて、東京らしい洗練や、クールな印象を東京の地酒のカラーとしてPRしていきたい。

木本硝子株式会社 代表取締役 木本 誠一 氏

【日本酒と酒器】

ワインには色やブドウの種類によってグラスを使い分けたりすることがあるのに、日本酒には種類に応じたグラスがないことに気づき、日本酒のグラス作りに着手した。

日本酒の楽しみ方においては、①日本酒の味や香りなどの特徴を引き出すグラス、②食事、料理とのペアリング、③女性がおしゃれに使える、飲めるグラスを取り込んだ新しいスタイルを提案してはどうか。海外で料理と日本酒と器をペアリングしているレストランの中には二つ星、三つ星の評価を受けている店舗もあることから、食材の生産者、酒蔵、飲食店、伝統工芸に携わる方々が一体となって新しいスタイルを世界に対して発信することで、新しい価値が生まれてくると考えている。



【ものづくりと地域活性化】

台東区の南部地域はかつて様々な職人が混在している地域であったが、近年は事業拡大によって郊外に出て行ってしまふ、人口や子どもの数が減って廃校が出てくる状況であった。そこで、廃校の活用を兼ねて、若いクリエイターの創業支援施設「台東デザイナーズビレッジ」を作った。

また、台東デザイナーズビレッジと周辺のものづくりの会社、飲食店、クリエイターが協力して、ものづくりをテーマにした「台東モノマチ」を2011年から展開している。2キロ四方に300~350件の店舗が点在し、1つの面としてもものづくりのまちとしての魅力を感じてもらおう本イベントは、3日間で延べ10万人のお客様に来ていただけるようになった。

地域活性化においては、地域ならではの特性、歴史、風土に合った活動の仕方があると思う。台東モノマチが成功したからといって、他のエリアで成功するとは思わないし、逆に多摩地域の酒蔵を中心とした地域の特性、地域との連携を進めた形で地域まちおこしができれば、日本が元気になるし、皆で明るい顔をして、おいしい酒が飲めるのではないかと考えている。

田村酒造場 代表 田村 半十郎 氏



【日本酒の需要喚起】

モノを売るうえで困っているのは少子高齢化。戦後のボリュームゾーンの方々がフェードアウトしていく中で若者を取り込むべく、業界全体でお酒の国内需要を喚起するよう努力していく必要がある。

また、外国から日本酒のオファーが少しずつ増えているなど、外国から日本酒が注目されつつある。今まで日本酒を海外に持って行ったことがないため、売り方を試行錯誤していく必要はあるが、フランスワイン同様、日本酒も世界でネームバリューを得られるよう、外需を伸ばしていきたい。

【面で捉える地域活性化】

全国の酒蔵は地域の伝統文化を担ってきた方が多いため、徐々に増えてきている酒蔵ツーリズムは観光振興や地域活性化に寄与できると考えられる。

しかしながら、地域活性化においては地域全体が繁栄しなければならない。地域の酒蔵は重要ではあるものの、点で個々の酒蔵が儲かれば良いという話ではなく、酒蔵ツーリズムにどんなスタンスやルートで来ていただくかなど、点を面にして活性化に努める必要がある。

面で地域を捉えて発展させるのは民間だけでは難しいので、市町村とも協力していきたい。例えば、現在、福生市観光協会、福生市商工会、福生市それぞれが同じような観光マップを作成しているので、もっと効率的なマップを作っていきたい。

VERTERE 合同会社 代表 鈴木 光 氏



【奥多摩でのビール造り】

ビールのお店を開く際、当初は都心での開業を考えていたが、ビールを造るということだけを見ると、時間をかけておいしいものを造るのは都心とする必要はないのではないかと考えるようになった。そんな時、たまたま知人の紹介で奥多摩に招待され、奥多摩を見て回った後に飲んだ缶ビールがいつもよりおいしく感じられて、ここでビールを造るのはありだと思い、奥多摩にビールの醸造所を開業した。

奥多摩は土日の観光客が多いので、土日にお店に注力して人を配置して平日はしっかり仕込む、メリハリのある事業展開ができるため、今では奥多摩で開業して良かったと思っている。

【地域振興とのかかわり】

当社はまだ本当に小さな会社で、そんなに何ができるというわけでもないが、とにかくよりおいしいビールを開発して、多くの人に認知されて奥多摩町に訪れていただくようになれば、それが結果的には地域振興にかかわってくると思う。

奥多摩に住み始めて4年目になるが、跡継ぎや担い手の不在から、近隣の店舗がどんどん閉店している。このままいくと、もう4年も経つと何もなくなってしまうのではないかという不安もあり、地域振興に関してはかなり早目に先手を打っていかねばいけないと思っている。

豊島屋酒造株式会社 主任 川上 一宏 氏

【イベントを通じた地域振興】

東村山市と協力して、「のみむら」というイベントを企画・運営した。久米川駅周辺の飲食店を飲み歩いた後、八坂神社で音楽イベントと久米川駅周辺以外の飲食店の出店を楽しむイベントで、イベント終了後もお客様が再び飲食店に訪れてくださったことから、弊社だけではなく、周囲の飲食店も儲かった。地域とのかかわりにおいては、1つだけの企業が一人勝ちしないよう連携をとっていくことが一番重要なのではないかと考えている。

今後は単発のイベントに加え、貸し切りバスで東村山を回り、お酒や観光スポットを楽しむ体験ツアーも企画している。企画にあたっては、事業主との連携を大事にしていくことがお客様を喜ばせることに繋がると考えている。



東京ワイナリー 代表 越後屋 美和 氏

【練馬でのワイン造り】

もともとは大田市場の仲卸で働いており、その時から東京産の野菜を東京の人々に食べてもらう「都産都消」の活動を始めた。その際に東京の農家を調べ、最初に行ったのが練馬区。住宅地の間にある小さい畑があるような都市農業で、周囲に宅地があるために農薬をあまり使用せず、1つ1つ手で丁寧に育てた野菜はすごくおいしいと思った。

ワインが好きだったこともあり、自然が豊かな練馬区で、地元の野菜に合うワインをその土地から発信していくのは面白いのではと思い、練馬区でワイナリーを開業した。

【地域とのかかわり】

当ワイナリーのワインは東京産のブドウで作っているが、東京でも畑が住宅地化しており、畑が少なくなっている。1度宅地になるとなかなか畑に戻せないため、東京や練馬の畑は貴重な財産である。その財産を残していくため、仲卸業時代の農家とのコネクションを活かして、東京でのブドウの栽培を呼びかける活動を始めた。

現状、東京では生産緑地法の関係上、土地の貸し借りはできないので、農家にはブドウ作りの資材を買っていただき、私たちが手伝いながらブドウを生産、生産したブドウにお金を払うという形式で栽培をしていただく。手伝いには地元の方々やワイナリー経営でできた繋がりなど、様々な人に来ていただいており、そこでコミュニティが生まれるのが面白いと思う。

また、来年は練馬で「世界都市農業サミット」が開催されるので、都市農業を世界に向けて発信するべく、運営委員も務めている。

